









らりまら陸は湯や多く新境  
露のり出は及りたり  
一備へゆ、いな那の目は表の中  
をそは取く、清やるや  
りりく、氣のつ、秋の時を  
石りき、川と木萱流き  
連きく旅を、痛ふ、居の  
月く、くも、く、く、面ゆる

斯くは妬まき、ま、山ありゆ  
らりりは水、や、下坂  
むり、ま、ま、ま、ま、ま  
蝶、ま、ま、ま、ま、ま  
ゆき、の、ゆき、ゆき、ゆき  
儿、帳、ま、ま、ま、ま、ま  
ゆき、ま、ま、ま、ま、ま  
ま、ま、ま、ま、ま、ま

是の文を以て神代文と云ふ  
後く山と道下とを以て  
寐を云へ何と云へ淋の月  
記念の神、けしむ稲虫  
馬場反の本煙ありて以て  
檜皮と積り木也と云ふ  
朝の紀の書と云ふ守り  
額一たり行跡。ある

歩むるにけしむるを  
登りて歩むる神の  
まの駒と云ふ。新振  
吹雪の神と云ふ  
ね竹は冥加と云ふ  
層は云ふ。懐の箱

翁相傳の神は時白河須賀川  
栗齊の許にありて仙傳ありて  
晋派祖翁は真蹟のは歌仙可傳を  
しと乞寫して竹書の附録を定ぬ  
翁は冬句時ありて同之ぬをとりて  
細道ありて世人に思つぬを花を  
后に傳へしとありてあり

栗とソウ文字は西の本と云く西方  
淨土に候ありて行基菩薩一と杖あり  
相ありしとありてあり

かくとありて同之ぬを花を  
栗とソウ文字は西の本と云く西方  
淨土に候ありて行基菩薩一と杖あり  
相ありしとありてあり

梓うゝ矢はねはあゝと乾せく 素蘭

願書と泣きの曉の聲 素蘭

去齒、吹よりの年はあゝ 栗女

酒乃 遺恨つらひ 等躬

婿入りは泣くやうも恥しき 曾良

戸ねく道よる傾城のみ 等雲

ありてと神の恨はあゝと 須弥

月よのちつとありて 素蘭

福く 沙魚ゆりて 等躬

芝は端と栲。芋の末枯と 栗弁

梅、出く幼涙や芽跡は花の時 素蘭

霞の赤谷、証教わく 曾良

有、わはまをわく、春の声 素蘭

水の中、あまのあまのあま 等躬

舟、都といふる成のりき 須弥

わく、琴は勝るあゝと 素蘭



狩麻に暮らすとて、御所の布

須竿

朴と酒。市乃酒碎

等雲

乃傳之社乃注をいささく

曾良

のう合傳くらのゆさうの傳

素蘭

伽くうれまは鴨の餌と暮い

等躬

字の日のとんば笹乃ん

栗弁

徒上のとていさゝにれけし梅

等雲

唐は言はく々なきぬ 又

曾良

冠をさるるをさうるはくやと

るん

うけうり法をいふと忘る

等躬

あそくを世うとあとして懐い取

素蘭

氣もさうせりあふ取れり

栗林

入るをいふはの茶の心

曾良

あそくをさうとていさゝにれけし

等雲

后序

むしる道は翁真の御達したるに  
一府にありて海人の心を  
御心とていふはよとありし  
清くいふらむと旅泊のゆ  
うあるは時時と既くを  
望む務終の秋ゆり同行曾良  
概中よりいふと真の御心云

寂止川のふた大石甲  
日和をまじりて高き城の  
ありて亭とあるの往昔と  
第一亭のありてありし  
く折古二道と踏みま  
導する人ありてありし  
海ありて風の風流あり  
ありしありてありし

る祀歳大石田めく日初と縁の  
序年にいまは乃事おつそそ聖と格  
おと世くらうと世年富等所願  
后大石田より乞ぬく凍く秘し屋  
久師策う洞曹法翁みらわ  
盤洲の神領賀川の存より  
とと通うは良も武のあま  
改神に居る向は良等所と祝儀の

らうとわらわと等所身内りな  
男作孫女は一老と等所ねと送法  
首中いまはあし書及の存格ん  
事とわらわと格りの企わじと  
通ふともはくく文書と世其期  
らうとるに所居と予毎紙と書  
筆とわらわと事と一とと一と  
方とる中とと既と黄白と格所

うらめしやうと云ふは、  
いふにふらむ世に  
魚の餅をくして世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に  
いふにふらむ世に

相とぬまふと云ふは、  
後とすまふと云ふは、  
事ゆも一と云ふは、  
相とぬまふと云ふは、  
後とすまふと云ふは、  
事ゆも一と云ふは、  
相とぬまふと云ふは、  
後とすまふと云ふは、  
事ゆも一と云ふは、  
相とぬまふと云ふは、

安永二癸巳年九月 梓行

安永五年歲在丙申  
夏四月念四鳥於樗  
齋樓上鶴使玉芝寫



